

# 乙 頁

第89号 通巻16巻第4号  
1996年11月30日 発行

守山市立埋蔵文化財センター  
☎0775-85-4397

☎524-02  
守山市立服部町2250番地



## ☆ 「弥生時代の戦争」展示会を振り返って

1996年11月2日から11月24日までの間、埋蔵文化財センターで「弥生時代に戦争があった」をテーマに特別展示会を開催しました。ほぼ同時期に国立歴史民俗博物館で「倭国乱る」の展示会が開催されています。今何故、弥生時代の戦争（戦い）が取り上げられるのでしょうか。守山市のセンターで戦争をテーマに特別展を企画した背景には、今年の5月から7月にかけて行なわれた下之郷遺跡の調査で、3条の環濠と門衛施設、銅剣、石鏃、石剣が出土、発見された事によります。この遺跡がどのような遺跡なのか、またこれらの遺物や遺構がどのような意味をもつのかを解明するための大きな命題がありました。展示会までの数回の職員同志の話し合いでは、戦争という言葉を使うほどの戦いはなかったという意見や、どのような相手と戦ったのかという疑問がだされました。答えは展示会のテーマの「弥生時代に戦争があった」としたとおり人間の集団同志が戦い、殺し合いをする行為があったと考えたのです。また、相手は野洲川流域内部や他の河川流域の集団で、遠いクニとの戦いは認めない立場です。「倭国乱る」では戦いの相手の想定は明確ではなく、列島規模での遺跡を扱ったため曖昧になってしまった感じを受けます。物資交流の覇権争いから祭祀の統一を巡る争い、また政権奪取をめぐる争いに転化すると考えています。下之郷遺跡の展示では「倭国乱る」のような全国規模での戦いを扱うことは出来ませんが、石剣・石鏃・銅剣・弓・楯などの武器、武具の出土地点を明確にすることによって、環濠に近い位置では相対的に武器の出土がおおく、ある地点では石鏃がムラの外から出土することが窺われたことから、環濠をはさんで内と外から弓矢のうちあいが行なわれたことが想定されました。

市内では、墓に埋葬された遺体を発掘することが不可能にちかく（埋葬された部分一棺桶が削られてのこっていない）戦いで死んだことを証明することは難しいと見られてきました。しかし「倭国乱る」の図録では甕棺に骨が残っていない状態でも、内部に石鏃や剣が出土するものも戦いで死んだことを想定しています。下之郷ムラの人々の墓と考えた吉身西遺跡の方形周溝墓の周溝から石鏃が3点出土しているが、これらの墓の内には矢をうたれて死んだ戦士の墓があるのではないかと考えられないでしょうか。下之郷遺跡の調査は今後も実施する機会があると思います。武器・武具の出土地点、数量に注意をい調査をおこなっていけば、「戦争」の証拠固めをすることが可能であり、墓の調査ではそれらの周囲の石鏃や石剣の出土は死んだ戦士の墓ということを証明することになるのではないのでしょうか。展示会をとおして、新たな課題の一つが浮かび上がりました。

## ☆ 発掘調査だより

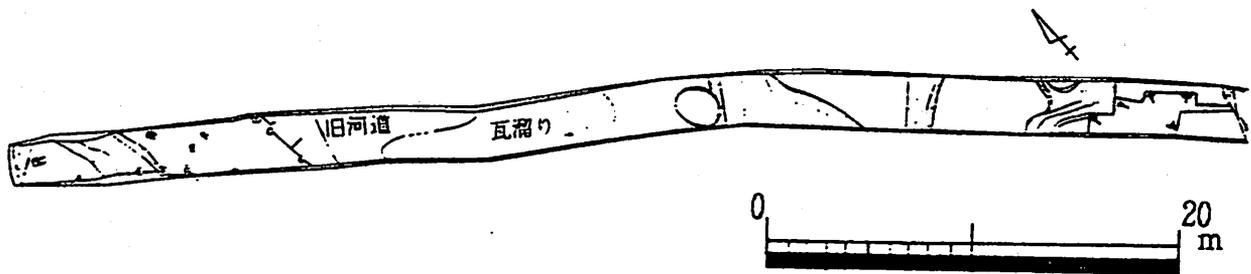
### 1、二ノ畦<sup>にのき</sup>遺跡<sup>ゐせき</sup>の調査

平成8年9月15日に現地説明会を開催して以降、調査範囲を拡大して、西側および西北部分の調査を続けています。前回の乙貞の記事では<sup>ほったてばしらたてもの</sup>掘立柱建物が12棟と<sup>いどあと</sup>井戸跡を中心に報告しましたが、今回調査をしている部分では、集落跡の北および西側を区画すると考えられる溝跡とその内側に掘立柱建物が広がっている状況が検出されています。この<sup>くわくろ</sup>区画溝の外側（北及び西）では掘立柱建物などの遺構が全く見つからず、奈良時代から平安時代の建物の範囲が限定できることが分かりつつあります。今後、年度末まで調査を進めていく予定です。（川畑）

### 2、赤野井<sup>あかのい</sup>遺跡<sup>ゐせき</sup>の調査

<sup>じゅんのり</sup>十二里町集落の北側で道路改良工事に先立ち、約250㎡を対象に発掘調査を実施しました。昨年度は水路をはさんで南東側400㎡を調査しており、奈良時代の掘立柱建物や井戸などが見つかっています。今回の調査では古墳時代前期頃の旧河道や奈良～平安時代と考えられる溝や柱穴、それに<sup>かわらだま</sup>瓦溜りが見つかりました。瓦溜りからは大量の瓦の破片にまじって奈良時代と考えられる土器が出土しており、この時期に<sup>いつかつはいき</sup>一括廃棄されたと考えられます。

赤野井遺跡は奈良時代の多数の建物跡をはじめ、<sup>ぼくしどぎ</sup>墨書土器（土器に墨で「大田」、「瓦」、「内」、「大」と書かれていた。）やへら描き土器（土器にへらで「赤見」、「大吉」、「正丁」と書かれていた。）などが出土したことから、野洲郡七郷のひとつである<sup>あけみごう</sup>明見郷の役所跡とする考えが有力です。今回の調査で出土した大量の瓦は周辺に寺院が存在したことを物語っており、この考えを支持する重要な資料といえるでしょう。（小島）



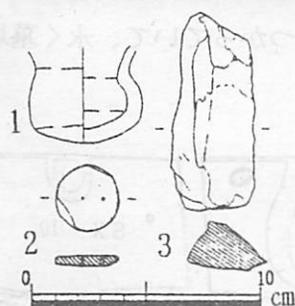
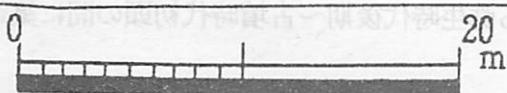
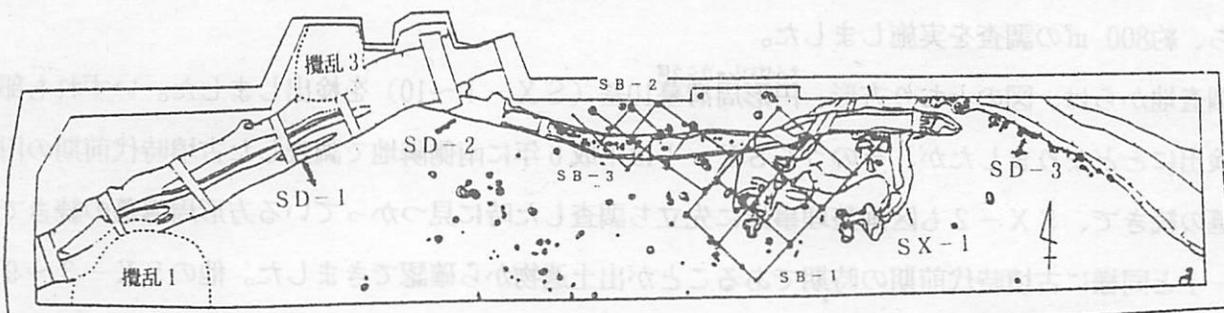
△赤野井遺跡平面図

### 3、古高<sup>ふるたか</sup>遺跡<sup>ゐせき</sup>（第11次調査）

古高遺跡の調査は10月末に終了しました。検出された遺構には、溝2条（SD-1・4）、旧河道（SD-3）、掘立柱建物3棟、<sup>どこう</sup>土壇（SX-1）などがあります。

今回はこれらのうち土壇についてお伝えしたいと思います。土壇は、不定形で調査区外へ広がっているため全容は不明ですが、断面の観察により2回に分けて掘られていたことがわかりました。ここから

は手づくね土器や滑石の原石が出土しています。また古い時期の土層の上層からは、滑石製の有孔円盤<sup>ゆうこうえんぱん</sup>も出土しています。(藤原)

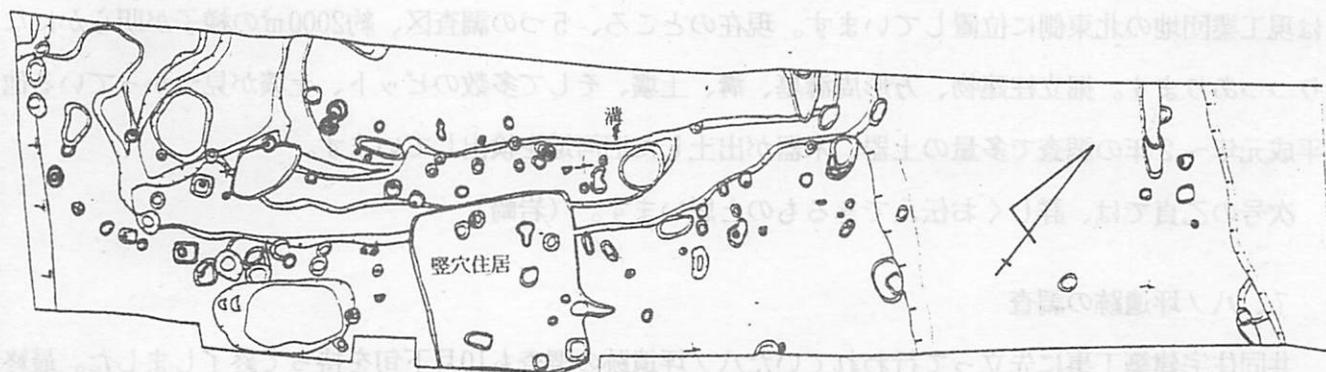


1. 手づくね土器
2. 滑石製有孔円盤
3. 滑石の原石



#### 4、吉身北遺跡の調査

都市計画道路の建設に伴い、勝部町<sup>かつべ</sup>の西友駐車場において10月から発掘調査を進めています。現在約300㎡の調査を終了しました。これまでに、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝等が検出されています。竪穴住居は一辺4mを測る小型方形の住居で、壁際中央近くにカマドを持っています。更に、同時期の掘立柱建物の柱穴とみられるピットが数多く検出されています。これらの遺構に切られて、コの字状に巡る溝が検出されています。幅約1~2m、深さ30cmをはかる溝で、古墳時代後期の土器が出土しています。昨年行われた隣接地<sup>りんせつち</sup>の調査に比べるとやや遺構密度が低いのですがこれから吉身北遺跡の中央部にむかって調査がすすんでいきますので、その都度報告していきたいと思ひます。(伴野)



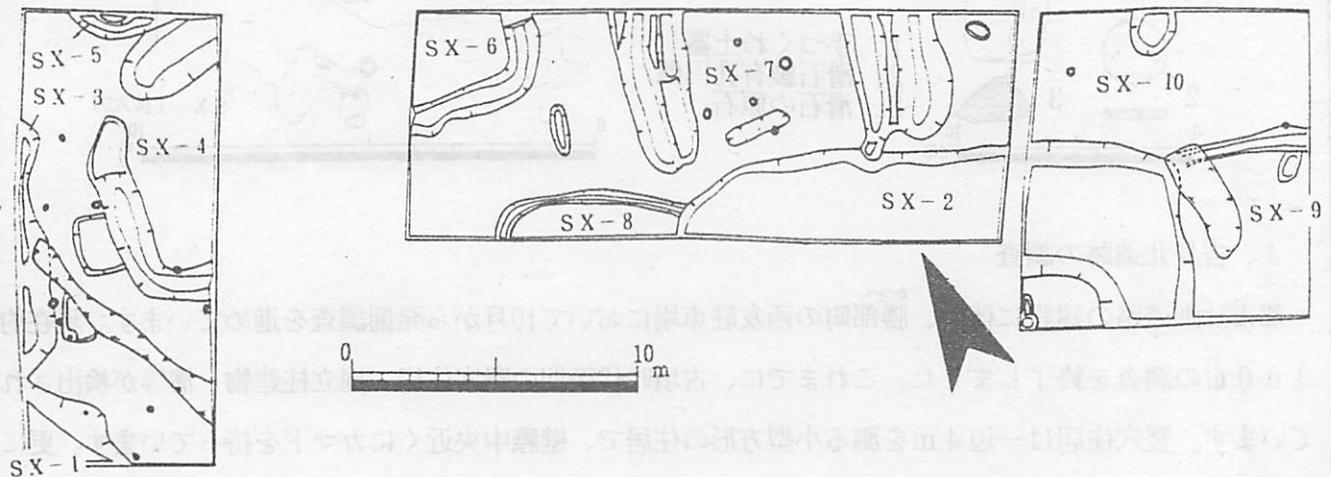
△吉身北遺跡平面図

## 5、酒寺遺跡の調査

播磨田町地先の区画整理地内で、平成8年10月1日～10月15日の期間で共同住宅と個人住宅建築に先立ち、約800㎡の調査を実施しました。

調査地からは、図のとおり方形、円形周溝墓<sup>えんけいしゅうこうぼ</sup>10基（SX-1～10）を検出しました。いずれも部分的な検出にとどまりましたが、そのうちSX-1は平成6年に南側隣地で調査した古墳時代前期の円形周溝墓の続きで、SX-2も区画整理事業に先立ち調査した時にみつかった方形周溝墓の続きで、SX-1と同様に古墳時代前期の時期であることが出土遺物から確認できました。他のSX-3～9の<sup>しょう</sup>詳細については判然としませんが、その切り合い関係から弥生時代後期～古墳時代初頭の間に築造されたものと考えられます。

周辺の調査でも、弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓が多く見つかり、永く墓域として土地利用されていたことがわかります。（岩崎）



△酒寺遺跡平面図

## 6、下長遺跡の調査

古高町字浮において工業団地造成工事に先立ち、発掘調査を10月下旬から着手しています。調査場所は現工業団地の北東側に位置しています。現在のところ、5つの調査区、約2000㎡の様子が明らかになりつつあります。掘立柱建物、方形周溝墓、溝、土壇、そして多数のピット、土壇が見つかったり他平成元年～2年の調査で多量の土器、木器が出土した旧河道を検出しています。

次号の乙頁では、詳しくお伝えできるものと思います。（岩崎）

## 7、八ノ坪遺跡の調査

共同住宅建築工事に先立って行われていた八ノ坪遺跡の調査も10月下旬を持って終了しました。最終調査区では、<sup>まいぼつ</sup>流路が埋没したのちに<sup>きず</sup>築かれた遺構を検出しましたが、<sup>かせん</sup>河川の<sup>たいせき</sup>堆積で生活面が不安定な為

平面形を確認するのは難しい状況でした。しかし、遺物の出土状況からみて自然の流れ込みによるものというより人為的な結果によると考えられます。時期的には縄文時代中期頃と思われます。(小出)

#### 8、吉身西遺跡(第74次調査)

前号でお伝えした目田川改修<sup>めだがわかいしゅう</sup>に先立つ、県立保健専門学校と市立図書館の間の調査についてお知らせします。第1区の約520㎡と平行して第2区の約500㎡の調査も開始しました。まず第1区ですが、4棟の竪穴住居を確認しました。6世紀前半から比較的時間をおかずに建てられたようです。規模は判明しているもので約30㎡を有しています。第2区では竪穴住居2棟、掘立柱建物を最低2棟確認しています。竪穴住居は土器片などから弥生時代後期から古墳時代前期の時期に属するようです。掘立柱建物は柱穴の一辺が80cm前後と大きく、ほぼ南北方向に建つという特徴がみられます。この掘立柱建物は隣接する第3調査区にも続いているようです。引き続き、第3調査区の調査を進めながら掘立柱建物の広がりなどを明らかにしていきたいと思えます。(山中)

#### 9、吉身西遺跡の調査(第75次調査)

市立図書館の南東側で、駐車場造成工事にともない、擁壁部分<sup>ようへき</sup>の調査を実施しました。延長約70m、幅約1mの調査地から溝跡・柱穴・土壌などを検出しましたが、狭かったため全体はよくわかりませんでした。遺物では、須恵器や土師器のほか滑石製の白玉<sup>うすだま</sup>も出土していて、古墳時代後期の時期と考えられます。隣接地では目田川改修にともない現在も発掘調査が行われていますが、この調査で見つかった溝に続くものとみられます。(畑本)

#### 10、吉身西遺跡の調査(第76次調査)

前号でお伝えしました休日急病診療所前の調査地から、北東に約50mの場所で、共同住宅建築に先立つ調査を実施しました。10月2日～31日までの期間で約400㎡が対象面積です。

遺構は竪穴住居、ピット、溝跡等を検出しました。竪穴住居は一辺6.2m×6.4mの大きさで、床面まで深さ約0.2mを測ります。4つの支柱穴が確認できたほか、中央と北東辺には焼土壌<sup>しょうどこう</sup>が見られました。遺物は少量でしたが、土器から古墳時代前期と考えられます。溝跡は、東から西に向かって走る幅約7～8m、深さ約0.4mの大きさを測り、黒褐色の粘土<sup>こっかっしよく</sup>が埋まっていた。遺物は少量ですが、高坏<sup>たかつき</sup>や甕<sup>かめ</sup>が出土しており、弥生時代後期の溝と考えられます。(畑本)

#### 11、吉身西遺跡(第77次調査)

守山警察署と県立成人病センターの間に広がる区画整理地内において、店舗付き個人住宅建築に伴い10月7日～10月16日までの期間に約200㎡を対象に発掘調査を実施しました。検出された遺構は、土壌(SK-1・2)、ピットを検出しました。土壌(SK-1)は一辺2.1m×1.7mで、深さ50mを測り

ます。また、この土壌から手づくね土器や、高坏、<sup>こがたまるぞこつぽ</sup>小型丸底壺などが出土し、これから古墳時代前期頃であると考えられます。(中村)

### 12、吉身西遺跡(第78次調査)

守山警察署から北東約500mの地点で個人住宅建築に伴い約200㎡、発掘調査を実施しました。遺構は、近世の耕作痕<sup>こうさくこん</sup>が検出され、土地利用の一端を知ることができました。また、<sup>しょうどこう</sup>焼土壌も検出され、破片ですが縄文時代の土器が少量出土しました。吉身西遺跡からは縄文時代後期末の集落が確認されており、この辺りまでこの時代の遺構が広がることが今回の調査で分かりました。(中村)

### 13、塚之越遺跡(第11次調査)

調査を開始してからちょうど1年たちました。今後來年の春まで継続して調査を行う予定です。

今回は第11調査区の溝から出土した銅鏃<sup>どうそく</sup>について報告します。この銅鏃<sup>どうそく</sup>は弥生時代の銅鏃と違って、作りが非常に丁寧で柳の葉のような形をしていることから、<sup>つなぎはかたどうそく</sup>柳葉型銅鏃と呼ばれています。また、古墳時代の前期(4世紀代)にかぎって古墳の副葬品として発見されており、古墳の副葬品研究から、当時の政治的つながりを示す遺物として注目されます。このような銅鏃が塚之越遺跡から発見されたことは、付近にある古墳時代前期の集落である下長遺跡と合わせて考えていく必要があります、今後の調査に期待されます。(佐々木)



△ 銅鏃



## ☆ 古高古墳群の測量調査(その1) ☆

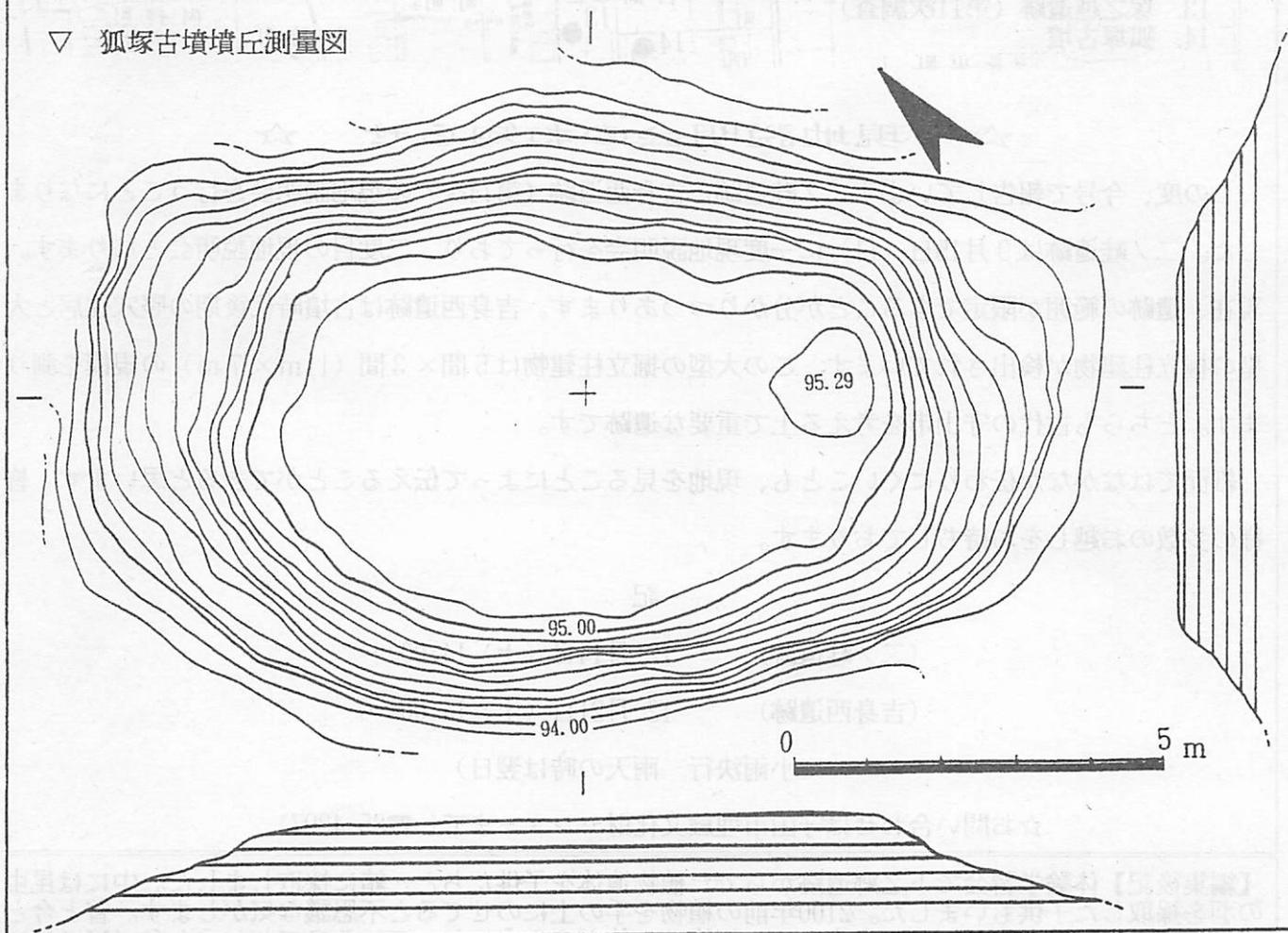
平成7年より毎年、<sup>ふるたかこふんぐん</sup>古高古墳群を夏休みに一基ずつ測量していこうと、大谷大学の考古学研究会のメンバー有志が、墳丘測量調査を実施しています。古墳群は、「<sup>きつねづか</sup>狐塚古墳」「<sup>まつづか</sup>松塚古墳」「<sup>こうだずか</sup>幸田塚古墳」の現存する3基の古墳によってなるものですが、いずれも未発掘、未測量で墓の形や造られた年代等不明な点を多く残す古墳群です。今回の調査で、それらの点について何らかの手掛かりが得られればと期待されます。今回は第1回目ということで、昨年夏に測量した「狐塚古墳」について紹介します。

(狐塚古墳)古高工業団地の日本マタイと桜宮化学の工場の<sup>きょうかんち</sup>狭間地にひっそりと残る古墳で、墳丘の上には竹が根を張り、鬱蒼とした竹林をなしています。地元の古老の話では、昭和40年代に工業団地が造成される前までは、周辺は水田で見晴らしのよい地域だったのですが、この塚の周囲だけは<sup>ざっしち</sup>雑種地で、草木が鬱蒼と茂り、うす気味の悪い所だったそうで、子供たちの「<sup>きもだめ</sup>肝試し」の場所にもなっていたそうです。この古墳の東側裾の部分には、「<sup>かんがい</sup>灌漑用の池の跡?」「大きな樹木を掘り起こした穴?」のような<sup>くぼち</sup>凹地があり、その際から墳丘上への登り口があったそうです。墳丘上には、昭和の30年ぐらいには、

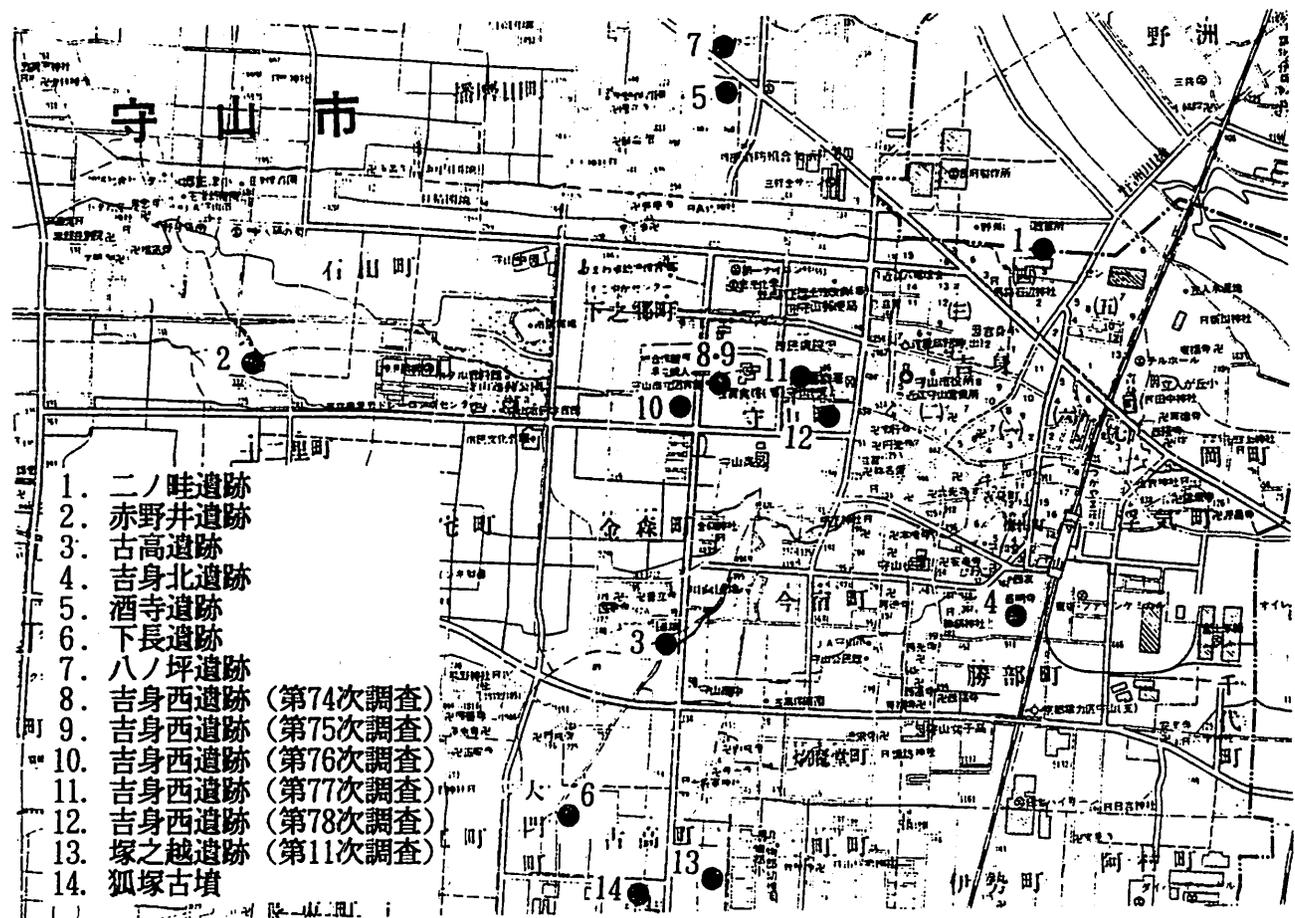
もうオンボロになっていたそうですが畳2帖程の基礎の上に瓦を葺いた祠が建っていたそうです。稲荷信仰に関わるものでしょうか？昭和10年位までは、旗をあげたり、お供物をしたりして、年に一度は「お稲荷さんのまつり」があったそうです。

この古墳の名前やこの地の字名「狐塚」は、どうもこのへんに関わりがありそうです。現在この古墳は、市指定文化財とし周囲を保存層で整地しているため、一見周囲の窪みが周濠（溝）のように見えますが、これは整地する時にできた落差の加減によるものです。古墳が造られた当初に周濠をもっていたかどうかは現状では埋没しているためよくわかりません。古墳の形は、平面図で観ると隅丸長方形をしていて、長辺が裾部で14.5m、短辺裾部で9.5mを測ります。現状での墳丘最下端と墳頂との比高差は1.6mで、墳頂はほぼ平坦になっています。墳頂の北西側には、コンクリートの残片や瓦の破片が散乱している所があり、古老の話と考え合わせると、「お稲荷さんの祠」があったところと推定されます。また墳丘のあちこちで小さな玉砂利がみられましたが、古墳が造られた当時のものかどうか分かりません。また墳形も「お稲荷さんの祠」がたてられた際に、少し改変されたのではないかと思います。なお、古墳測量のための草刈りの際に、土師器と須恵器の小破片を採集することができました。小片であるため、細かな時期をとらえることはできませんでしたが、古墳が造られた年代を考える参考資料となりえるものです。（年代は3つの古墳をまとめて、別の号で報告したいと思います。）（川畑）

▽ 狐塚古墳墳丘測量図



# ◇ 守山市内遺跡調査地図



## ☆ 現地説明会のお知らせ ☆

この度、今号で報告しています二ノ畦遺跡と吉身西遺跡（第74次）の現地説明会を行うことになりました。二ノ畦遺跡は9月15日（日）に一度現地説明会を行っており、二度目の現地説明会となります。現在、遺跡の範囲が限定できていることが分かりつつあります。吉身西遺跡は古墳時代後期の竪穴住居と大型の掘立柱建物が検出されています。この大型の掘立柱建物は5間×3間（11m×7m）の規模を測ります。どちらも古代の守山市を考える上で重要な遺跡です。

紙面ではなかなか伝わりにくいことも、現地を見ることによって伝えることができます。皆様の多数のお越しをお待ちしております。

### 記

（二ノ畦遺跡） 12月14日（土）14:00～

（吉身西遺跡） 12月21日（土）14:00～

（小雨決行 雨天の時は翌日）

☆お問い合わせは守山市埋蔵文化財センターまで（☎85-4397）

【編集後記】体験学習会で下之郷遺跡からでた植物遺体を子供たちと一緒に採取しました。中には昆虫の羽を採取した子供もいました。2100年前の植物を手の上に乗せると不思議な気がします。昔と今では随分自然環境も変わっています。100年後は一体どのようなになっているのでしょうか？（M. N）